

狩猟採集民バカの女性による植物性食物分配の実践

平成 26 年入学

派遣国：カメルーン共和国

関野文子

キーワード：狩猟採集民、バカ・ピグミー、食物分配、相互行為

・対象とする問題の概要

食物分配は狩猟採集社会における特徴の一つであるとされ、これまで数多くの研究で報告されてきた。食物分配がなぜ行われるのかについては、生態学的理由や社会・文化的理由などさまざまな仮説が立てられてきたが、これらの議論の中心は、男性が狩猟で獲った獣肉の分配であり、食生活の中心を担う女性の料理の分配について十分に議論されてきたとは言い難い。一方、狩猟採集社会の特徴として、社会階層が生まれにくいなど平等主義的な社会であることが挙げられるが、食物分配はこうした集団内の「平等性」実現の一端を担っている。よって、狩猟採集社会の食物分配を理解することは、単に狩猟採集社会の食習慣を理解するだけでなく、狩猟採集社会全体の解明につながると考える。

・研究の目的と概要

本研究は、カメルーン東南部に暮らす狩猟採集民バカの社会を対象とし、食物分配が持つ機能や社会的・文化的意味を明らかにすること、食物分配の現場で起きている交渉を人びとの会話に着目し分析することを目的とする。調査は、カメルーン東部州オ・ニョン県メソック郡に位置する L 村で行った。今回は、食物獲得に関わる女性の生業活動、食物の分配、人びとのコミュニケーションの三点を中心にフィールドワークを行った。まず、女性の料理の分配に焦点を当て、一人の女性が行う食べ物の調達から調理、そして皿に分けて分配するに至るまでの一連の流れに関して、聞き取りおよび直接観察をおこなった。



写真 1 キャッサバをむく女性



写真 2 キャッサバの葉をうすで潰す女性

・フィールドワークから得られた知見について

バカは狩猟採集のほか、農耕も行っている。L村では、キャッサバ、プランテンバナナが二大主食作物であるが、バカの所有する畑は規模がかなり小さいため、主食の大半は農耕民の畑から得ている。食物の分配に関しては、集落に暮らす全ての成人女性26人を対象として調査をおこなった。その結果、以下の点が明らかになった。

第一に、バカの女性が所有する畑面積と食物の収穫・採集量の調査により、所有物や食物へのアクセスに、女性間で大きな格差はないことが分かった。畑の面積によって獲得可能な食べ物の量に影響が及ぶと仮定すると、食物の獲得に関しては平準的で、食物分配は畑に由来する不平等を解決するために行うものであるとは考えにくい。第二に、料理の分配における人びとの会話の聞き取りから、食物分配には、直接の交渉なしに行われる分配や相手からの直接、あるいは間接的な要求によって生じる分配があることが分かった。一方で、実際にできた料理を運ぶのは子どものため、分け手の女性がどの女性にあげるのか、あるいはもらい手がどの女性からもらったのか分からないという事例がみられた。これは、分配に対する認識を明らかにする上で鍵となる事例である。

以上の結果から食物分配は、誰かが食べられないことを回避するという生態学的理由のみならず、「その場」における人々の状況ややりとりなどさまざまな条件や要素が重なることで生じる現象で、絶対的な規則やルールに基づいて行われていることではないことがわかった。この食物分配のあいまいさやルールの緩やかさこそが、食物分配を円滑に行うための、最も重要な特徴であると考えられる。ルールが絶対的ではないからこそ、例えその時、もらえなくとも、もしくはあげられなくとも、その時は「たまたまそうだった」という偶然性を理由にすることで、軋轢や相手への不信感、あるいは責任感や負い目が発生することを抑制できるのではないかと考える。食べるという行為自体の責任をみなで「分散させ合う」ことで、良好な社会関係を保ちながら、食物のやりとりができていないのではないかと考えた。



写真3 料理を運ぶ少女たち



写真4 料理を盛り付ける女性

・今後の展開・反省点

今回の調査では、成人女性に着目したが、子どもや男性など食物分配を取り巻くその他の人々の動きについては、まだまだ不明な点が多い。また、料理の分け手である女性が行う分配の結果は明らかになったが、分配に至るまでの食物の獲得、調理などの段階で女性が何を考えて分配をしようとしているのか、何をもって判断しているのかについても不明な点が多い。以上を踏まえ、今後の調査では食物分配を集団における行為として、より包括的に検討することを目指すとともに、女性の分配行動の背景にある認識に迫ることで、食物分配の実態を解明していきたい。

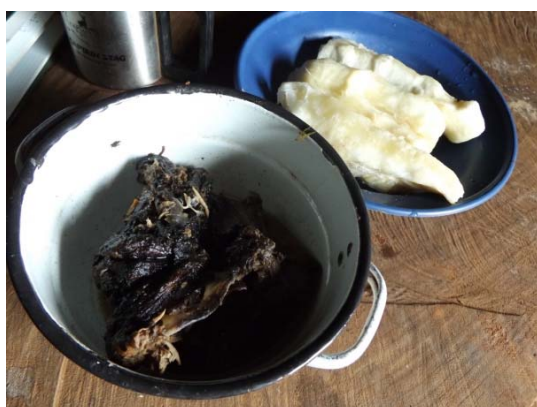


写真 5 キャッサバと獣肉の料理



写真 6 熟れたプランテンバナナと
キノコの料理